長期ビジョン審議会　平成30年度第１回総会　議事録概要

１　日　時：平成30年5月23日（水）15:30～17:30

２　場　所：兵庫県公館　大会議室

３　参加者

委員：旭委員、足立委員、伊藤委員、大西委員、岡田委員、小倉委員、小田委員、柏木委員、加藤委員、角野委員、亀田委員、木築委員、草郷委員、久保委員、古武家委員、佐久間委員、佐竹委員、柴田委員、清水委員、瀧本委員、突々委員、内藤委員、中島委員、中瀬委員、永田委員、能島委員 、登里委員、畑委員、畠山委員、濵田委員、福岡委員、藤本委員、古屋委員、三村委員、吉富委員、吉本委員、米山委員　（37名）

代理：北野委員（政井代理）、久元委員（藤岡代理）（2名）

合計39名

県側：井戸知事、水埜政策創生部長、白石計画監、坂本局長、守本課長

４　議事　「兵庫2030年の展望（仮称）について」

〇伊藤委員

頭の良い人の考え方はこのような内容かもしれないが、社会についていけない人たちの考え方が入っていない。20 代の時、あまり学力が無くても生活できて就職できる場があった。今は小売店の跡継ぎもおらず、農業、林業も家族を養っていける状況ではない。山林も農地も荒れ放題。ますます勉強しないと生活が成り立たない社会の中で、落伍してくる人がたくさん出てくる。そういう人たちをどう社会参加させていくか、考えていく必要がある。

〇中島委員

兵庫県は2030年には人口が527万人になるといっても、全国的には大人口を抱えている自治体。東京等と比較するから今一つとなるが、大人口を抱えた大きい地方自治体というところをまずは確認したい。ここに書いてあること全部が問題で、改善されなければならないことばかりである。それぞれの地域で大学の先生やコンサルタントなどの専門家が見れば悪いところははっきりわかる。

問題はそこに住んでいる人が論議していないこと。いよいよとなった時にお願いします、という話になる。だから限界集落の問題も改善せず、財政負担が大きい町になっている。行政はいろいろ考えて専門家の方と良い案をたくさん作ってくれているが、県民がまじめに論議しないといけない。10年後を見据えて訴えることが、我々にとって大事である。

〇吉本委員

貧困にしても都市と田舎にしても格差は広がっている。2030 年に向かって格差が解消された地域になるという視点をぜひ盛り込んでいただきたい。たとえば子供の貧困などの格差は広がっており、それが日本全体として直っていない。2030 年に向かってそういう状況が解消されている兵庫ができていくというようなメッセージが出るような表現を入れて欲しい。

〇古武家委員

水素エネルギーを使う社会が展望されているが、水素社会に行く前に再生可能エネルギーを主軸としたエネルギーミックスの社会が到来する。はっきりとそれを出すべき。原発問題は避けて通れないが、兵庫として先進的に明確化することが必要。西谷地区（宝塚市）で、太陽光を農業と発電でシェアリングしている。こういうことも含めて県の先進性を打ち出していただきたい。

〇畠山委員

次世代のエネルギーとしてバイオガスが入ってくる。農業やレストラン、食品工場、家庭から出る廃棄物を発酵させて作るバイオガスを暖房や発電に利用する。垂水下水場（神戸市）では太陽光と下水処理から出てくるバイオガスのダブルエコ発電を行っている。今後、身近な地域資源を生かした地域エネルギーが拡大していくのでバイオガスを加えていただきたい。

〇藤本委員

現在の農業は水稲が中心。畑化すると斜面でも耕作ができ、水の管理も少なくて済む。大きな機械も導入できる。2030 年の作物栽培の提案をしていただきたい。

地元でビジョンを語るが、なかなかついてきてくれる人が少ない。自分が生きている間はこのままで良い、という人が多い。今の 60 代くらいの人は自分の次世代について関心が低く、どう解決していくのかということもテーマとして欲しい。

〇米山委員

この展望を見ると、2030 年には待機児童が無くなり、ワークライフバランスも整って明るいよ、というメッセージを子育て世代の人たちへ伝えることができるか疑問。今、現実に子育てしている人たちが安心できるような現実的なものを踏まえながら考えていただきたい。

〇突々委員

水産で、資料１の P12 と、資料２の P35 で書いてあることが違っている。P35 では「養殖業の漁獲量が天然魚を上回っている」とある。このままの状況で天然魚が獲れないようになって養殖魚が上回るなら可能性としてあり得る。養殖魚がもっと発展して天然魚を上回るという意味で書いてあるのだろうが、現在、兵庫の海は、養殖をする場所は大方利用されてしまっている。海の利用の仕方が抽象的に書かれ

ている。全部 IT でやるようなイメージになっている。もう少し正確に 10 年先の漁業の姿を描いて欲しい。栄養ある海に戻して、漁船漁業が復活して、いかなご、ちりめんが増えている、という姿なら良いが、資料２の養殖が発展してロボット化されて養殖の魚がどんどん増えるというのと、資料１で描かれている内容は異なっている。なぜ資料２の内容が 2030 年の兵庫の漁業の姿として描かれたのかが分からない。

○中瀬委員

子供たちの自由時間をどうつくるか、コーディネートするか、という視点がいる。欧米では公園の中にプレイロット（子どもの遊び場）があって子どもを自由に遊ばせており、そのような空間が必要。

環境でグリーン市場の拡大が書かれていて、これ自体はよいことだが、消費者サイドからの視点でこのような状況が生じてきたことを言って欲しい。自然再生については、高度成長の時にどう再生していくのか、という中で整理すると良い。このことを生活シーンの中でも表現してもらえたらすごく良い。

○内藤委員

大規模農業が大きく書かれているが、今実際に携わっている人は、自分たちの農業、営農組合、農村の姿の将来像を描けない。子供が継いでくれないといった切実な問題がある。ここでは大規模農業で解決されるようにしか書かれていない。営農組合や一般法人化など、どうしたら良いか議論が進まないような状況。具体的に農村の実態をよく知って描いて欲しい。大規模化だけで進んで行って良いのか疑問。県民局単位で大きな農業ビジョンを描けないか。

一般の家庭でも野菜づくりを熱心にやっている。稲は作らないけど野菜は作る。ドイツのクラインガルテンのように、それぞれの庭で野菜を自給していけるようなところを作っていくと、消費者も生産者の立場や農作物の大事さがわかってくる。そういうものを中核に据えられないか。

都市と農村の交流について、都市の方が農村に来て体験するといったものを拡げられたら良い。インバウンド観光でモデル施設などができれば周辺の観光資源と合わせて良いものができる。どんな規模で人を呼ぶかモデルケースができれば活性化につながる。

多くの外国人が技能研修生として兵庫を訪れている。そういう人たちへの日本語教育をどうするかが課題。県下各地の国際交流協会では必ずしも日本語教師の有資格者が教えているわけではなく、また地元のボランティアが日本語教育を行っている。企業で働く人々の日本語教育であるにもかかわらず協会への企業の支援が十分ではない。英語で ESL（英語以外を母国語とする人たちのための英語）があったように、日本語もセカンドランゲージとして効率的に教えられれば交流時代に備えられる。いくら翻訳機ができても人を通じた交流は大事。

女性の人口が減る中で女性や障害者が働いてという視点ではなく、社会の重要なポジションに女性が就けば環境が変わる流れで書くべきではないか。女性の視点、

考え方、そういうものを世の中に還元していかないといけない。女性の活躍・活用を広い視点でとらえて１項目増やして欲しい。

○能島委員

子供たちの状況は、貧困、不登校など厳しい状況にある。そういった子供たちに行政がどうサポートしていくのか、という観点は今後のビジョンを考えていくときに必要。県民、子供たちの不安を払拭していくことが重要。

こういったビジョンや行政計画に若者の声が反映される仕組みが大切。10 年ほど前、大阪府に青年政策会議という、概ね 20 代以下の若者が府の政策について検討する会議が設置された。長期ビジョン審議会の付属機関として若者が政策について議論する場ができれば面白い。

○久保委員

但馬のズワイガニ漁獲量は日本一だが全国には知られていない。兵庫はいろいろな産品が全国１位だが意外と知られていない。全国の食コンクールでここ数年間金賞をとっているのも但馬のお米。兵庫県はスペシャル級の食材が集まっている、ということをもっと打ち出しても良い。

農業者がいない、漁業者が少なくなっているという現状があるが、知っていく、食べていくということが大事。子供たちが知ることができるよう、深掘りして PR していくことが必要。ほとんど県内の産品を使って味付けのりを作ったが準備に５年かかった。12 年後に向けては準備がないと目指す姿は実現できない。スモールステップの夢も作りつつ、進めていただきたい。

自由時間は非常に良い案。そこに時短家電の普及が書かれているが、防災時、またエコとしては役に立たない。年輩者の知恵は防災にも強いし、環境にも優しい。子供たちの参画にもなる。時短家電で片付けるというよりは根本的部分の見直し、そこでの育成を教育部門として考えて欲しい。

子ども食堂に「貧困の方来てください」と言っても田舎では来てくれない。もう少し掘り下げた形で子供の教育ということを視点に入れて欲しい。

出会い支援でおせっかいおばさんがいるが、子育てでも背中を押すおせっかいおじさん、おばさんが必要。生涯現役とリンクさせると良いのではないか。

○草郷委員

「兵庫 2030 年の展望」を誰のものとするのかが極めて重要であり、県民目線が大事と考える。資料１に記載された「策定趣旨」（P1）の内容はどれもその通りだが、「不透明感」という言葉が使われている。そうであれば、現在兵庫にどういう課題があって、兵庫県民がどういう取り組みをしているのかを踏まえつつ、2030 年の未来を展望するという内容にしていくことが重要なのではないか。そうすることで、この展望が「県民にとって自分事として考える資料」になる。資料２の生活シーンは、2018 年の現状の県民の生活を踏まえたシーンもつくり、それを提示すれば、これから生活の場でどういう変化があるかを示すことになり、自分事として

考えてもらえる。

ｐ３では、2030 年に向けた環境変化として 5 点が整理されているが、この内容は、専門的に理解していかないと読み切れず、多くの県民には理解のハードルが高い。そこで、このページに具体的生活シーンと絡めて伝えられるように資料を修正できないか。生活シーンに関する記述があると、資料２の意義が見えてくる。資料１の中に資料２の要素が盛り込まれていないという感覚があるので、そこに工夫を施してほしい。

県民目線でということであれば、長期ビジョンで実施してきた「美しい兵庫指標」から県民生活の現状がどうなっているのか、県民の主観で現状がどうなっているかということを盛り込めないか。繰り返すが、この資料を読んだときに、県民が少しでも自分にとって 2030 年の兵庫を考えようという意識づけにつなげられたらよい。また、2030 年に向けて、良いシナリオとそうでないシナリオの提示があれば、私たち自身が考えるためのきっかけになる。その辺の工夫があればよい。

資料２の 2030 年の生活シーンの表の「地域×年齢」の分類は誤解を招く。「地域」を、居住している特性、例えば「大都市部」「都市部」から「農村部」までのように、生活スタイルを反映した内容の軸にしていただければ、理解しやすく見ることができる。地域の軸のところを再検討してほしい。

資料１のｐ７で、「特色ある専門学科を有する県立学校」の表があるが、「理数」「国際」「その他」と分類されている。「その他」の分類項目を「芸術、福祉、防災など」で表現できないか。また、兵庫県の県立中等教育学校も十分特色を持っているのでその記載について検討して欲しい。

○福岡委員

先ほど漁業の話があったが人と自然の共生が何とかいっている分野と言える。兵庫県はコウノトリの野生復帰を成功させた。コウノトリと田んぼや農地との共生がうまくいった例である。これは共生の成功例なので兵庫県は自慢しても良い。

一方、P32 の森林資源の活用はバラ色に書いてあるが、これは実現性が低い。漁業やコウノトリでのように林業でもバイオマスの利用などを取り入れて共生できる方法ができないか。材木は将来輸入できなくなる。スギやヒノキ林を今から大切にしないと大変なことになる。森林における人と自然の共生について、幅広い視野(防災、漁業、水資源、シカやイノシシ対策、限界集落)で検討する必要がある。

○畑委員

策定趣旨の３つ目に「長期ビジョンと地域創生戦略をつなぐ」とあるが、兵庫県のビジョンは創造的市民社会、環境優先社会、しごと活性社会、多彩な交流社会、この４つが重要な視点。個別の政策は進むが、取組を統合する仕掛けが残念なところにある。県民も参加して行動計画、評価指標も作ってやっているこういう取り組みは他にない。地域ではビジョンを描きづらいということであれば、審議会としては、ビジョンの発展形に力を入れていくのもポイント。兵庫県ではすでにビジョンを作ったノウハウがある。

企業をしっかり巻き込むにはどうするかを考える必要がある。地域課題を解決するために企業にどう関わってもらうかが重要。

実際に、これまで県民行動プログラムをはじめとして地域ビジョン委員の皆さんと取り組みを進めてきた。新しいフェーズをどう作っていくか。山陰海岸ジオパーク、銀の馬車道、淡路環境未来島もそうした取組から生まれた展開だった。市町と一緒に進めていく協働プロジェクトも必要。

県政 150 年の後の、次の 30 年、あるいは 50 年後の県政 200 年に向けてどうしていくか、どうつなげていくか、どう円滑に移行していくか、その議論も大事。

○柏木委員

資料１のＰ８だが、子供を産んで欲しいという印象が強い。子供の目線が１つも出てこないのが残念という印象。子供たちは貧困に直面し、学習でも課題を抱えている。子供たちの課題を解決するということも盛り込んで欲しい。

○瀧本委員

読めるけど心に落ちてこない。三宮から兵庫県を見ている資料になってはいないか。田舎からの視点が抜けている。もう一度見直して作る必要がある。そのためには人や技術、伝統、新しい取組など地域が持っている資源、情報を活かした視点が大切。里山、里池、里海の視点も必要。

地域ビジョンと県のビジョンが乖離しているのではないか。もう一度、地域ビジョンとの関わりを整理していただきたい。

2030 年の姿としていろんなことが書かれているが、2030 年に兵庫がどうなっているか、と聞かれて一言で答えられるか。そういうものを表す大きな枠組みが抜けている。各自治体が総合計画をつくっているが、兵庫県としてこうありたいというものをまずは出すべき。

○三村委員

姫路市には姫路城があるが、姫路城や銀の馬車道から離れると、賑わっているとは言えない。取りこぼしがないように発掘して、姫路城や銀の馬車道にリンクさせて、地域資源として中播磨を一つにまとめるような取り組みをしたらよい。賑わいのない地域でも、他から見たら魅力ある資源をもう一度発掘する必要がある。播磨は１つということで、播磨は地域資源に恵まれた宝の地域と位置付けてプロジェクトを進めると活気あふれる地域になる。

○吉富委員

兵庫のこれまでの歴史の振り返りをしてはどうか。もう少し兵庫らしい特徴を入れる必要がある。関心のない人にも見てもらうためには兵庫はこんなことがあるということを見せて、身近に感じられるようにすべき。関心のない人も、頑張ろうかと思ってもらえるようにしないといけない。多様性や、これまですばらしいことをしてきたということをもっと自慢したら良いのではないか。

○木築委員

若者の人づくりについて、家庭レベルでは技術の普及のおかげで格差は感じていない。交流五国で二地域居住という言葉が多く使われていて感謝している。Ｉターンは持続性を考えると課題がある。地域はよそ者を受け入れる力が弱い。地域を外の人に開くことや、楽しんでもらえる環境を作ることも地域ビジョン委員会の役割と考えている。

○柴田委員

子育ての安心は保育だけではなく、地域に入っていない子供や、入れない保護者をどのように地域に入れていくのかという視点が必要。中学生、高校生でちょっと外れた子供たちを、どう支えていくのかを考える必要がある。

兵庫は体験に関しては、兵庫の匠やものづくり大学、中学生の職業体験など国も真似するような良い事業を展開している。それが未来の人づくりに入るのではないか。伝統技能についても兵庫県は技能立県ということで応援していただいているが、特に、先端技術に対しては、技術進歩に対するスキルアップが大切だが、伝統技能に関して、なかなか若年の方がスキルアップする機会がない。伝えていく、継承していくことも１つ挙げていただきたい。

ｐ１の拡大生産年齢人口とあるが、いやな仕事、危険な仕事、きつい仕事は老人にということも出てくる。その辺の視点も気を付けていただきたい。拡大年齢人口が多いということで安心している場合ではない。

○政井委員代理

トライやる・ウィークを農家でやっているが、子供に来てもらっても時期によってはやる仕事が無い時がある。時期的なものを考えていただきたい。

○登里委員

生涯現役では、この年齢でも活躍できる、ということを強調して欲しい。活動はできるが、活動する場がない。生涯現役と書いてあるが、県や市で現役として活躍してもらう目標みたいなものを作ってもらえると、状況がまた違ってくる。リタイヤした人が活躍できる場を見つける機会を作ってもらえると、元気が出てくる。高齢者をどのように活用するかを考えると元気な兵庫になっていく。

○足立委員

2025 年の地域医療構想、保健医療計画に関わってきたことからするとこの展望はギャップを感じる。2025 年に向けて、本当に地域に密着したものになっているのか、緻密に圏域ごとに課題を抽出して議論してきた。それにいきなり上から降ってきたというものではなかなか結び付かない。

地域医療構想は限界地域や、開業医も高齢化して地域医療が成り立たなくなるなど、深刻な状況に対応するためのプランでもある。それを踏まえた中でビジョンを描かな

いといけない。先制医療は医学界でも評価が定まっていない。ゲノム医療もまだまだ課題が多い。最先端で頑張っておられる先生ほど、倫理観やあり方を慎重に検討して進められている。AI にしてもロボットにしても、流行のように並べても短期間では解決しない。医療の原理原則から遠隔診療や先端技術を見極めながら進めないといけない。今は「オンライン診療」として対面診療を原則に慎重に進めている段階である。今回並べられている次世代医療の在り方そのものが議論されていない段階で、未来形として並べられるのはいかがなものか。

○清水委員

人づくりについて、自主的に考えられる人材育成に力を入れるべき。一人一人の生産性を上げることで問題を解決できる。トライやる・ウィークは単発の活動であり、小中高一貫して将来を考える力をどう身に着けるかという観点が必要。

○角野委員

この展望が県土で空間的にどう配置されるのか。人口が減る状況の中で都市と地域の関係は変わらざるを得ない。兵庫県全体はどういう空間像を描くことになるのか。将来的には隙間や地域アンバランスができてくる。個別の課題ごとに出てくると全体が見えづらくなる。

空間的、時間的に 2030 年に実現しようと思えば大半は芽が出てきている。時間バランスの中でどの芽を育てていくのか、時間や空間に関する感覚・リテラシーを持っておいたほうが良い。

国際化はむしろ地方の方がダイレクトにつながっている例がある。地方の中核都市とその周辺部との関係も違う形になるだろう。ただそれが 12 年後なのか、5 年後なのかという可能性を考える必要がある。でないと、自分事として考えてくれる県民は少ない。12 年後は、ほとんどの人がまだ生きている。12 年後の自分を想像したとき、本当にそれで良いのか、まさに自分事として考えていけるような作り方、例えば空間や時間のビジョンを立体的に配置して見ることはできないか。

○古屋委員

先端技術で最低限安全安心を確保するということは分かるが、ハートフルな部分がもう少し欲しい。楽しい、あるいは活力が生まれるといった気持ちの部分が書いてあると良い。

○中島委員

キャッチコピーについて。兵庫県は全国７位の人口で、様々な生産物や工業製品を作っている。「なかなかやるぞ兵庫県、実力の兵庫県」というのはどうか。住んでいる県民の誇りにつながるようなキャッチコピーをお願いしたい。実績、実力、夢と同時に自信を持たせてくれるようなキャッチコピーをお願いしたい。

○佐竹委員

低賃金に依存していたビジネスモデルは無くなる。アメリカは、GDP は伸びているが格差は広がった。AI や IoT が普及するとそれらの利用格差が広がってくる。

ダイバーシティマネジメントを上手くすれば、必ずしも労働人口は減らない。アクティブシニアに、どう社会で活躍してもらうか。新たに人を採用することも重要だが、人が辞めない会社づくりも重要。その根本はオーナーシップ。企業にオーナーシップを持てるような人材が育成できれば人材の逼迫は緩和される。

中小企業の海外進出は、単に進出というより海外事業展開を具体的にどう運用していくのかが重要。

今後、AI、IoT が急速に進展する。AI による判断代行、IoT で生産管理をしたスマート工場の増加、ドローンによる測量だけでなく塗装等の実施、スマホ決済の普及などの現象が加速度的に 2030 年以前に現れ、我々自身の生活、企業経営、地域の活性化について非常に大きな要素になってくる。

○加藤会長

様々な意見をいただきお礼。例えば、佐竹委員が指摘されたようにアクティブシニアの活躍が期待される一方、足立委員が指摘されたように高齢化社会を超えるような重老齢社会であることは、コインの裏表であると言える。様々な顔を持つ兵庫県として、これからどう対応するかが問われているということではないか。

以上